

Title	ホップ代数の拡大(群スキームの変形と整数論への応用)
Author(s)	増岡, 彰
Citation	数理解析研究所講究録 (1996), 942: 53-65
Issue Date	1996-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/60157
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ホップ代数の拡大

島根大 増岡 彰 (Akira Masuoka)

はじめに おおざっぱに言って空間と可換代数とが対応し、演算を付帯させて群と可換ホップ代数とが対応する。そこで非可換なホップ代数を「非可換群」と捉え群論の結果をホップ代数に拡張しよう、という試みが1960年代 Chase-Sweedler によるこの分野の誕生以来なされてきた。彼らより少し遅れて、G. Kac は同じ精神のもと作用素環論の立場から U 構造をもつホップ代数 (彼の呼ぶ ring groups) を研究し優れた業績を挙げたが、Chase-Sweedler 学派の人々にはつい最近まで知られていなかったように思われる (唯一 Kaplansky のレクチャー・ノート "Bialgebras" の文献に Kac の論文を見つけることができる)。一方、作用素環論において ring groups は現在カツ代数と呼ばれ注目を浴びている。ただ、例えば Enock-Schwartz の教科書に見られるようにその取扱いは多分に解析的であって、筆者にとって代数的な Kac の原論文の方がわか

りやすい。

さて、群拡大の理論は Singer, Hofstetterらによりホップ代数にまで拡張され、非可換なホップ代数を構成するひとつの方法を提供している。しかし Kac はそれ以前に有限 ring groups の拡大論を確立しており [K], 前者に比し一般性では劣るものの特有の結果も有しより興味深い。この小文では、Kac による拡大論を現代流（またはホップ代数流）に少しアレンジしたうえ解説し、拡大のなす群 (Opext 群) のいくつかの計算例を与えたい。

記号 k を基礎体とし、テンソル積、代数、ホップ代数等 k 上のものをさす。扱うホップ代数はすべて k 上有限次元のものである。

トリビアルなホップ代数 G を有限群とするとき、直ちに次の2つのホップ代数が構成される。

<例> 群環 kG 。ただし余積 Δ , 余単位元 ε , 対合 (antipode) S は次で定義される:

$$\Delta(s) = s \otimes s, \quad \varepsilon(s) = 1, \quad S(s) = s^{-1} \quad (s \in G)$$

<例> G の関数環 $k^G = \text{Map}(G, k)$ (= 関数 $G \rightarrow k$ の全体)。ただし積は point-wise に定義される。 $s (s \in G)$ の特性関数を e_s ($e_s(t) = \delta_{st}$) とするとき Δ, ε, S は次で定義される:

$$\Delta(e_s) = \sum_{t \in G} e_t \otimes e_{t^{-1}s}, \quad \varepsilon(e_s) = \delta_{1s}, \quad S(e_s) = e_{s^{-1}}. \quad \square$$

ここで kG と k^G は互いに双対であり, $\{s\}, \{e_s\}$ は互いに双対基底をなす. これらは次のように特徴づけられる.

<命題> k を代数閉体とする. 有限次元ホップ代数が (代数として) 可換かつ半単純ならば k^G の形; 双対に, 余可換かつ余半単純 (双対が可換かつ半単純) ならば kG の形である.

□

上記2種のホップ代数を トリビアルなホップ代数 と呼んでよいであろう. ノントリビアルなホップ代数を構成するのに kF の k^G による拡大 (F, G 有限群) を考察する方法がある.

群拡大 まず (アーベル核をもつ) 群拡大について復習しよう. Γ を群, M を加法群とし, 群の短完全列または Γ の M による拡大

$$0 \rightarrow M \xrightarrow{\iota} E \xrightarrow{\pi} \Gamma \rightarrow 1$$

が与えられたとする (アーベル核とは M がアーベルを意味する). このとき,

$$\iota(\gamma m) = \bar{\gamma} \iota(m) \bar{\gamma}^{-1} \quad (\gamma \in \Gamma, m \in M)$$

により M に左 Γ 加群としての作用がひきおこされる. ここで $\bar{\gamma} \in E$ は $\pi(\bar{\gamma}) = \gamma$ をみたし (つまり $\gamma \mapsto \bar{\gamma}$ は π のセクション), 明らかにそのとり方によらず上記作用は決る. さて M の Γ 作用を 1 つ固定するとき, それをひきおこす拡大全

体の同形類 $\text{Opext}(\Gamma, M)$ は Baer 積によりアーベル群をなす。その単位元は $E = M \rtimes \Gamma$ (固定した作用に関する半直積), ι, π は自明なもの, なる拡大の類。さらにこの群はコホモロジー群 $H^2(\Gamma, M)$ と同形である。

ホップ代数拡大の定義 有限群 F, G を固定するとき,

$$(A): k^G \xrightarrow{\iota} A \xrightarrow{\pi} kF$$

の形の拡大のみを考える。ここに, A は有限次元ホップ代数 (Δ_A, ε_A を余積, 余単位元とする), ι, π はホップ代数射である。

<定義> (A) が (kF の k^G による) 拡大 であるとは,

ι が単射, π が全射 かつ

$$\text{Im } \iota = \{a \in A \mid (I \otimes \pi) \cdot \Delta_A(a) = a \otimes 1\}$$

をみたすこと。□

このとき, 各 $x \in F$ につき

$$A_x := \{a \in A \mid (I \otimes \pi) \cdot \Delta_A(a) = a \otimes x\}$$

を x 成分として $A = \bigoplus_{x \in F} A_x$ は F の次数つき代数, $A_1 = k^G$, となることは容易にわかる。さらに大事なのは,

<命題> A は F の接合積である: $A = k^G * F$. もっとくわしく, 各 $x \in F$ につき A の可逆元 \bar{x} が存在して

$$A_x = k^G \bar{x}, \quad \varepsilon_A(\bar{x}) = 1, \quad \bar{1} = 1$$

をみたす。□

上のように特別な場合に定義を述べるとかえってわかりにくいかもしれない。有限次元ホップ代数の拡大 $K \xrightarrow{\iota} A \xrightarrow{\pi} H$ が、 $\text{Ker } \pi = K$, $\text{Coker } \iota = H$ が同値という意味で合理的に定義でき、必ず弱い意味で split (我々の用語で cleft) するのである。上記 $x \mapsto \bar{x}$ が "セクション" である。

Matched pairs さて拡大 (A) から相互作用

$$\triangleright : G \times F \rightarrow F, \quad \triangleleft : G \times F \rightarrow G$$

がひきおこされることを見る。これらは一般に (群同形でなく) 集合同形の作用である。

上で見たように $A = k^G * F$ (接合積) だから、 F は k^G に通常のように

$$x \mapsto e_s = \bar{x} e_s \bar{x}^{-1} \quad (x \in F, s \in G)$$

により代数同形として作用し、 k^G が可換だから \bar{x} のとり方に依らない。さらに k^G は直交中等元 e_s で張られるから、

$$x \mapsto e_s = e_s \triangleleft x$$

により一意に決る作用 \triangleleft が得られる。(A) の双対

$$k^G \xleftarrow{\iota^*} A^* \xleftarrow{\pi^*} k^F$$

を考え左右交換して議論することにより、もう一方の作用 \triangleright が得られる。

勝手な $\triangleright, \triangleleft$ がひきおこされるわけではない。

<命題> $\triangleright, \triangleleft$ がみたすべき条件は, 直積 $F \times G$ が

$$(x, s)(y, t) = (x(s \triangleright y), (s \triangleleft y)t),$$

ただし $x, y \in F, s, t \in G$, を積として $(1, 1)$ を単位元にもつ群をなすこと.

<定義> [T] 上記条件をみたす $\triangleright, \triangleleft$ を構造としてペア

(G, F) を matched pair と呼ぶ. 群 $F \times G$ のかわりに $F \bowtie G$ と書く.

Opext群 matched pair (G, F) を固定し, その構造 $\triangleright, \triangleleft$ をひきおこす拡大全体の同形類 (同形の定義は明らかである) を $\text{Opext}(kF, k^G)$ と書く.

2つの拡大 $K = k^G \longrightarrow A_i \longrightarrow kF$ ($i=1, 2$) に対し, そのテンソル積から下図のように pull-back, push-out により拡大 $(A_1) \cdot (A_2)$ を得る:

$$\begin{array}{ccccc} K \otimes K & \longrightarrow & A_1 \otimes A_2 & \longrightarrow & kF \otimes kF \\ \parallel & & \uparrow & \text{p.b.} & \uparrow \Delta \\ K \otimes K & \longrightarrow & B & \longrightarrow & kF \\ \text{積} \downarrow & \text{p.o.} & \downarrow & & \parallel \\ K & \longrightarrow & A_1 \cdot A_2 & \longrightarrow & kF \end{array}$$

具体的には

$$B = \bigoplus_{x \in F} (A_1 \otimes A_2 \text{ に於る } (x, x) \text{ 成分}),$$

$$A_1 \cdot A_2 = \underset{K \otimes K}{K} \otimes B \quad (\text{積 } K \otimes K \rightarrow K \text{ に關する}$$

係数拡大).

<命題> $\text{Opext}(kF, k^G)$ は上で定義される積によりアーベル群をなす. smash 積 $k^G \# kF [T]$ を中項 (ι, π 自明) に持つ拡大の類が単位元.

計算例 2つ 3つの matched pairs に関し Opext 群の計算結果を示すのが目的である.

作用 $\triangleright: G \times F \rightarrow F$ がトリビアル ($s \triangleright x = x, \forall s \in G, x \in F$), $\triangleleft: G \times F \rightarrow G$ が群同形の作用ならば, これらは matched pair (G, F) の構造であり, $F \rtimes G = F \ltimes G$ (半直積) となることに注意しよう. また正整数 n に対し C_n は位数 n の巡回群を表すものとし,

$$\begin{aligned} \mu_n &= \mu_n(k) = \{\zeta \in k \mid \zeta^n = 1\}, \\ k^\cdot &= k \setminus \{0\} \text{ (乗法群)} \end{aligned}$$

とする.

<定理> (cf. [K]) 次に定義される matched pair を考える:

$$F = C_2 = \langle x \rangle, \quad G = C_n \times C_n = \langle a \rangle \times \langle b \rangle,$$

$$\triangleright \text{トリビアル}, \quad \triangleleft \text{は } a^i b^j \triangleleft x = a^i b^j \quad (i, j \in \mathbb{Z}/n)$$

で定義される群同形の作用.

$(k^\cdot)^2 = k^\cdot, (k^\cdot)^n = k^\cdot$ ならば $\text{Opext}(kF, k^G) \simeq \mu_n$. \square

$\zeta \in \mu_n$ に対応する拡大 $k^G \xrightarrow{\iota} A_\zeta \xrightarrow{\pi} kF$ は次のように定義される. $K = k^G = \sum_{i, j \in \mathbb{Z}/n} k e_{ij}$ (e_{ij} は $a^i b^j$ の双対基底) とおく. K環 とは代数 A と代数射 $K \rightarrow A$ とのペアを意

味する。K環 (A, ι) は一元 \bar{x} で生成され定義関係式

$$\bar{x}^2 = \sum_{i,j} \zeta^{ij} e_{ij}, \quad \bar{x} e_{ij} = e_{ji} \bar{x} \quad (i, j \in \mathbb{Z}/n)$$

を持つものとする。余代数構造 $\Delta: A_S \rightarrow A_S \otimes A_S$, $\varepsilon: A_S \rightarrow k$ は

$$\Delta(\bar{x}) = \sum_{i,j,ns} \zeta^{jn} e_{ij} \bar{x} \otimes e_{ns} \bar{x}, \quad \varepsilon(\bar{x}) = 1 \quad (*)$$

で定義される K環射。ここに代数 $A_S \otimes A_S$, k はそれぞれ $K \xrightarrow{\Delta_K} K \otimes K \xrightarrow{\iota \otimes \iota} A_S \otimes A_S$, $K \xrightarrow{\varepsilon_K} k$ と共に K環と見る。最後に π は $\pi(\bar{x}) = 1$, $\pi(c) = \varepsilon_K(c) 1$ ($c \in K$) で定義される代数射とする。

第2の計算例に移ろう ([M1]).

<定理> 次で定義される matched pair を考える:

$$F = C_n = \langle x \rangle, \quad G = C_n \times C_n = \langle a \rangle \times \langle b \rangle,$$

$$\triangleright \text{は トリビアル, } \triangleleft \text{は } a^i b^j \triangleleft x = a^{i+j} b^j \quad (i, j \in \mathbb{Z}/n)$$

で定義される群同形の作用。

$(k^\bullet)^n = k^\bullet$ ならば

$$\text{Opext}(kF, k^G) \simeq \begin{cases} \mathcal{M}_n \times \mathcal{M}_n & (n \text{ 奇数}) \\ \mathcal{M}_n \times (\mathcal{M}_n / \{\pm 1\}) & (n \text{ 偶数}) \end{cases} \square$$

n が奇数の場合に $(\zeta, \eta) \in \mathcal{M}_n \times \mathcal{M}_n$ に対応する拡大の中項 $A_{\zeta, \eta}$ を記述しておこう (ι, π は前と同様)。 $K = k^G$ を前のおりとする。 $A_{\zeta, \eta}$ は K環として一元 \bar{x} で生成され定義関係式

$$\bar{x}^n = \sum_{i,j} \eta^i e_{ij}, \quad \bar{x} e_{ij} = e_{i-j,j} \bar{x} \quad (i,j \in \mathbb{Z}/n)$$

をみたす. Δ, ε は (*) と同じ式で定義される K 環射. この $A_{\zeta, \eta}$ は $\zeta \neq 1$ ならば自己双対 ($A_{\zeta, \eta} \simeq A_{\zeta, \eta}^*$) という著しい性質をもつ.

半単純ホップ代数の分類 さらに k を標数ゼロの代数体, $n = p$ を奇素数とする. $A_{\zeta, \eta}$ ($\zeta \neq 1$) はいずれも p^3 次元のノントリビアル半単純ホップ代数である. 逆にそのようなホップ代数はこれらで尽される. ただし 2つのホップ代数拡大が同形でなくてもそれらの中項が同形であり得るから, $A_{\zeta, \eta}$ の間の同形・非同形を判定する必要がある. 実際,

<定理> [M2] k, p を直前のとおりとする. $1 \neq \zeta \in \mu_p$, $f \in \mathbb{F}_p^* \setminus (\mathbb{F}_p^*)^2$ を任意に選び固定するとき, p^3 次元半単純ホップ代数のうちノントリビアルのものは

$$A_{\zeta, 1}, A_{\zeta^f, 1}, A_{\zeta, \zeta}, A_{\zeta^f, \zeta}, \dots, A_{\zeta^{p-1}, \zeta}$$

のうちのただ1つに同形である.

<注意> 筆者にとってホップ代数拡大の考察は, 半単純ホップ代数の分類が動機にあった. 素数 n 次元の半単純ホップ代数は中零群の性質をもつので, 分類が拡大の考察に帰着できるのである. 分類結果として現在のところ他に, k を標数ゼロの代数体とするとき, 素数 p 次元のホップ代数は必ず半単純で kC_p に等しいこと (Y. Zhu), p^2 または $2p$ 次元の半単

純ホップ代数はトリビアルなものに限ること(筆者)などが知られている。

計算例もうひとつ $\triangleright, \triangleleft$ が共にノン・トリビアルなる matched pair を定義するため次のことを注意しよう。 L は有限群であって、 F, G を部分群にもち、積 $F \times G \rightarrow L, (x, s) \mapsto xs$ が全単射であるとする。このとき

$$sx = (s \triangleright x)(s \triangleleft x) \quad (s \in G, x \in F)$$

を以って定義される $\triangleright, \triangleleft$ は matched pair の構造であり、積 $F \rtimes G \rightarrow L$ は群同形となる。

<例> $n \geq 4$ を整数とし、 $L = S_n$ (n 次対称群) にとる。巡回置換 $a = (12 \dots n)$ に対し部分群 F, G を

$$F = \langle a \rangle = C_n, \quad G = \{s \in S_n \mid s(n) = n\} = S_{n-1}$$

により定義する。これらは上の条件をみたすから matched pair (S_{n-1}, C_n) が得られる。 $\triangleright, \triangleleft$ は共にノン・トリビアルで特に

$$s \triangleright a^i = a^{s(i)} \quad (s \in S_{n-1}, 1 \leq i \leq n-1).$$

一方 \triangleleft は具体的に書き下せない。

<定理> [M1] $(k')^n = k'$ ならば上で得られた matched pair (S_{n-1}, C_n) に対し $\text{Opext}(kC_n, k^{S_{n-1}}) = 0$. \square

ところで群拡大の場合と同様、ホップ代数拡大にもコホモ

ロジカルな記述が存在する。実際 $\text{Opext}(kF, k^G)$ はある 2 重コチェイン複体の全複体のヤコビコホモロジー群と同形になる。前 2 つの計算例に於てはコホモロジーを扱うのは得策でなかった。生成元と関係式という最も素朴な方法で思いのほか容易に結果が得られるのである。設定が複雑で結論が単純という、最後の例に至ってはじめてコホモロジーに頼ることになる。

Kac のコホモロジー完全列 かくして最後の定理の証明には Kac による次の 5 項完全列 $[K; M1]$ を用いる：

$$\begin{aligned} H^2(F \times G) &\rightarrow H^2(F) \oplus H^2(G) \rightarrow \text{Opext}(kF, k^G) \\ &\rightarrow H^3(F \times G) \rightarrow H^3(F) \oplus H^3(G) \quad (\text{完全}) \end{aligned}$$

ここに $H^*(\)$ はトリビアル加群 k' を係数にもつ群コホモロジーを表す。この興味深い完全列は、先に述べた 2 重コチェイン複体を見て群コホモロジーが導来関手 Ext^* に等しいことをキーとして得られる。

申し遅れたが、最後の完全列を除けば、拡大に関する諸結果は kF, k^G より一般に余可換ホップ代数 H , 可換ホップ代数 K に関して成立つ (Singer, Hofstetter)。ただ Kac の完全列だけは、ホップ代数のコホモロジーが何かの導来関手に等しいことを期待しづらいう以上、 $H = kF, K = k^G$ の場合特有のものと思われる。

カッツ代数拡大, ホップ代数拡大 元来有限 ring group, 今日
 という有限次元カッツ代数, とは複素数体 \mathbb{C} 上の半単純ホップ
 代数のことであり, Kac [K] 自体 \mathbb{C}^G の \mathbb{C}^G によるカッ
 ツ代数拡大の理論である. それを考えるには, コホモロジー
 に関し係数 \mathbb{C}^\bullet を

$$U = \{ \alpha \in \mathbb{C}^\bullet \mid |\alpha| = 1 \}$$

に制限する必要がある. 我々はここまで一般の体 k 上で考え
 るかわりに $*$ 構造を無視してきた. しかし普遍係数定理によ
 り

$$H^*(\Gamma, \mathbb{C}^\bullet) = H_*(\Gamma, \mathbb{Z}) = H^*(\Gamma, U) \quad (\Gamma \text{ 有限群})$$

だから, Kac 完全列の結果としてカッツ代数拡大の Opext 群
 とホップ \mathbb{C} 代数拡大の Opext 群とは一致するのである.

ここに述べた内容の詳細はプレプリント [M1] にあります.
 リクエスト下されば喜んで送らせていただきます.

最後になりましたが, 今回の研究集会で終始お世話になり
 ました関口先生, 諏訪先生にお礼申し上げます. ありがとう
 ございました.

文献

- [K] G. Kac, Extensions of groups to ring groups, Math. USSR Sbornik 5 (1968), 451-474.
- [M1] A. Masuoka, Calculations of some groups of Hopf algebra extensions, preprint, 1995.
- [M2] A. Masuoka, Self-dual Hopf algebras of dimension p^3 obtained by extension, J. Algebra, in press.
- [T] M. Takeuchi, Matched pairs of groups and bismash products of Hopf algebras, Comm. Algebra 9 (1981), 841-882.